

*Raffiné Journal vol.25*

懐かしさの正体  
— 思い出ではない —

ふと、胸が揺れる。

どこで触れたのかは、わからない。  
思い出そうとしても、手がかりはない。

それでも確かに、  
「知っている」という感覚だけが残る。

懐かしさは、過去に向かう感情だと考えられている。

けれど、ときどき  
それとは逆の向きで現れることがある。

初めて見るはずのものに、  
理由のない既視感が重なる。

記憶を探しても、何も見つからない。

それでも感覚だけが先に立ち上がる。

それは思い出ではない。  
認識よりも前に触れている何かである。

ある俳優が舞台に立った瞬間、  
会場の空気が変わった。

まだ何もしていない。  
言葉も発していない。

それでも、  
場の温度だけが微かに揺れた。

観客の多くが、  
同じように息をひそめる。

理由は説明できない。

ただ、どこかで触れたことがあるような、  
名づけられない感覚だけが残った。

その感覚を、  
過去の記憶に結びつけようとする、  
すぐに崩れる。

似ている出来事は見つからない。

それでも、  
何かだけが一致している。

言葉にしようとした瞬間、  
その感覚は少しだけ遠ざかる。

街の風景や、  
音、光の中でも、  
同じ感覚がふと現れることがある。

初めて触れたはずなのに、  
拒絶する気配がない。

むしろ、  
ずっと前から知っていたかのように、  
静かに受け入れてしまう。

記憶はない。

けれど、感覚だけが一致している。

懐かしさは、  
過去を思い出している感覚ではないのかもしれない。

むしろ、  
思い出す前に触れてしまっている状態に近い。

認識が追いつく前に、  
すでに何かが一致している。

それが、  
理由のない既視感として立ち上がる。

懐かしさとは、  
記憶ではなく、  
説明の外側で起きている接触である。



思い出では、なかった。



R.

Raffiné Journal vol.25  
2026

美学思想家  
古川玲奈

発行：Raffiné